『比較論理学研究』第2号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書(2004)

『分析論後書注解』におけるトマス・アクィナスの知識論
－*Expositio Libri Posteriorum*, lib.1, lect.1による－

水田　英実

1．はじめに

『分析論後書』においてアリストテレスが，論証を通して得られる確実な知識としての学的認識について論じていることは，よく知られている。もっともそのことが西欧思想界に知られるにいたるのは，ヴェネチアのヤコブ(Iacobus Veneticus)による十二世紀前半のラテン語訳以降のことである。

『オルガノン』と総称されるアリストテレスの論理学書のうち，『分析論後書』を除く他の五つ（『範疇論』『命題論』『分析論前書』『トピカ』『ソフィスト論駁』）は，既に六世紀にボエティウスによってラテン語への翻訳がなされていた。ボエティウス自身は『分析論後書』も翻訳したと記しているけれども，少なくともヴェネチアのヤコブによればその現物は伝わっていない[1]。

いずれにせよ『自然学』『形而上学』『ニコマコス倫理学』等々，アリストテレスの著作の大部分は，十二世紀ルネサンスと呼ばれる時期まで，西欧の知的伝統から亡失されていたのである。『オルガノン』についても，『範疇論』と『命題論』を除けば，この時期に再発見されるまで，じっさいには充分に知られていたとは言えない状況にあった[2]。

さて，アリストテレスは『分析論前書』において，推論すなわちいわゆる三段論法の形式について体系的な考察を行ったあと，『分析論後書』において，確実な知識をもたらす論証のあり方をめぐって生じる諸問題を取り上げている。そのための詳細にわたる考察を展開すべく，『分析論後書』の冒頭の一節を次のように書き出している。それによれば，確実な知識としての学的認識の成立に先立つ，何らかの認識があらかじめ存在している，ということがまず指摘されているのである。

Πᾶσα διδασκαλία καὶ πᾶσα μάθησις διανοητικὴ ἐκ προϋπαρχούσης γίνεται γνώσεως.[3]

[1] L. Minio-Paluello and B.G. Dod, (ed.), *Analytica Posteriora, Translationes Iacobi, Anonymi sive 'Ioannis', Gerardi et Recensio Guillelmi de Moerbeka*, in *Aristoteles Latinus*, IV, 1-4 (Desclee de Brouwer, 1968), p.XII; Boetius, *Commentaria in Topica Ciceronis*, I (PL 64, col. 1051B): "Quod qui priores posterioresque nostros Analyticos, quos ab Aristotele transtulimus, legit."

[2] Alain de Libera, *La Philosophie Medievale*, PUF, 1993.

[3] Bekker, 71a1 in W.D.Ross (ed.), *Aristotelis Analytica Priora et Posteriora*, OCT, 1964(1982). なお、ロスを監修者とするオクスフォード版英訳アリストテレス全集 (*The Works of Aristotle*, Translated into English under the Editorship of W.D.Ross, Vol.1, *Analytica Posteriora* by G.R.G.Mure, Oxford 1928) では、これを次のように訳している。"All instruction given or received by way of argument proceeds from pre-existent knowledge." また次の邦訳がある。「思考のはたらきによる、すべての教授、すべての学習は、どれもみな、〔学習者の内に〕予め存する認識から生まれてくる。これはすべての事例をひとつひとつ眺める時、明瞭である。実際、数学的な諸科学はこの方式で得られてくるし、その他の技術のそれぞれもまた同じである。」（加藤信朗訳、アリストテレス『分析論後書』、アリストテレス全集１，岩波書店、1971）なお同箇所の訳注で、この一節は人間における確実な知識の成立に関するアリストテレス説の特徴をよく示していると評し、アリストテレスの知識論は「人間における知の習得を原初に与えられる知的所与の展開、完成態(ἐνέργεια)として把握するもの」であって、「これによって、一方においては、知識の授受を、物品の授受のような、当事者の外部で、当事者に付帯する事柄の内で起こる変化として把握する自然主義的な知識解釈が遠ざけられると共に、他方においては、知識の習得論におけるプラトンの想起説のミュトス性が斥けられ、「学習」と「教授」の可能性が、人間存在に定位されて存在論的に基礎づけられた」としている。

ヴェネチアのヤコブは，この一節を次のように翻訳している。翻訳の時期は，1125年から1150年の間と推定される。冒頭から数語目にある διανοητική に intellectiva (知性的)という訳語をあてているところに特徴がある。

Omnis doctrina et omnis disciplina intellectiva ex preexistente fit cognitione. Manifestum est autem hoc speculantibus in omnes; mathematiceque enim scientiarum per hunc modum fiunt et aliarum unaqueque artium.[4]

十二世紀から十三世紀にかけてヤコブ訳のほかにも『分析論後書』のラテン語訳がいくつか出されている。ソールズベリのヨハネに帰される（従来は無名氏のものとされてきた）新訳は，1159年には存在していたと考えられている。

Omnis didascalia et omnis disciplina deliberativa ex preexistenti fit cognitione. Manifestum autem hoc contemplantibus in cunctis; etenim mathematice discipline per hunc modum veniunt et aliarum unaqueque artium.[5]

前二者がギリシア語からの翻訳であったのに対し，クレモナのゲラルド(Gerardus Cremonensis)のものはアラビア語訳からの翻訳であった。1187年以前に成立していたとされる。冒頭の部分は次のようになっていて前二者と多少違う。

Omnis doctrina et omnis disciplina cogitativa non fit nisi ex cognitione cuius precedit esse. Et huius quidem propositionis veritas nobis manifesta fit per inductionem; quod est quoniam scientiarum disciplinalium questiones non sciuntur nisi per hunc modum, et similiter unaqueque artium reliquarum;[6]

メルベケ(Guillelmus de Moerbeka)訳は，ヴェネチアのヤコブによるラテン語訳の改訂版であって，1269年頃につくられたとされる。冒頭の部分は次のようになっている。

Omnis doctrina et omnis disciplina ratiocinativa ex preexistenti fit cognitione. Manifestum est autem hoc speculantibus in omnes; mathematice enim scientie per hunc modum proveniunt et aliarum unaqueque artium.[7]

ところで，トマス・アクィナスによる『オルガノン』の『注解』には『命題論注解』と『分析論後書注解』が含まれている[8]。いずれも十三世紀後半の，アヴェロエス主義の台頭に対峙するために，トマス・アクィナスがパリ大学に戻った時期(1268年−1272年)に書かれたものである。『命題論注解』を執筆した時期は，アリストテレス禁令が出された1270年12月から翌1271年10月の間と推定されており，第2巻の始め(Bekker,19b31)で中断している。

『分析論後書注解』の執筆を開始したのは，恐らくその直後であろうとされる。パリ滞在中のことであったから，既にメルベケによる改訂版が出ているけれども，トマスが使用したテキスト（Bekker, 79b22 まで。第1巻第26講まで）はヤコブ訳である。その後トマスはナポリに赴き，メルベケ訳を用いて1272年末までに残りのテキスト（第1巻第27講から第2巻第20講まで）の注釈を終えている[9]。

これら二つの『注解』はトマスの死後(1274年)パリ大学に送り届けられている。その後，しばしば一組になって他所にも広まり，『分析論後書』については，54の写本の現存が知られるまでになったのである。では，トマス・アクィナスは，同書冒頭の箇所をどのように解釈しているのであろうか。『分析論後書注解』（第1巻第1講）において，トマス・アクィナスはア

[4] L. Minio-Paluello (ed.), *op.cit.*, p.5

[5] *Idem*, p.111.

[6] *Idem*, p.187.

[7] *Idem*, p.285.

[8] Thomas Aq., *In Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, ed., R.M.Spiazzi, O.P., Marietti, 1955(1964).
Id., *In Libros Posteriorum Analyticorum Expositio*, in *Sancti Thomae Aquinatis Opera Omnia* t.1, *Commentaria in Aristotelis Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum*, Leonina, 1882.

[9] Jean-Pierre Torrell,O.P., *Initiation à saint Thomas d'Aquin, Sa personne et son œuvre*, 1993.

リストテレスの知識論について詳しく論じている[10]。その論考の跡をたどることを通して，かえってトマス・アクイナス自身の知識論についても，その特質を明らかにすることができるであろうという見通しが立つことは言うまでもない。

2．論証は何のために必要か

トマスの『注解』によれば，アリストテレスの『分析論後書』の主題は，特に論証的な推論としての三段論法について詳細に論じることにあった (liber Posteriorum analyticorum, qui est de syllogismo demonstrativo (Marietti, n.6))。ちなみに『分析論前書』は，論証に限らずいわゆる弁証の場合にも共通する推論としての三段論法の形式について，一般的に論じたものであるとしている (liber Priorum analyticorum, qui est de syllogismo simpliciter (*ibid.*))。

さて，トマスによれば，このような主題をもった『分析論後書』の冒頭の部分において，アリストテレスが最初に「すべての教授，すべての学習」に言及したとき，「すべての認識」に言及しなかったのは，特筆に値することであった。その理由は，この箇所の注釈においても，次のように簡潔に繰り返されている。それは「必ずしもすべての認識が，より先なる認識に依拠しているわけではない。さもなければ，無限に遡行が起こってしまう。そうではなくて，あらゆる学問知識は先在する認識があって始めて形成される (Quia non omnis cognitio ex priori cognitione dependet; esset enim in infinitum abire. Omnis autem disciplinae acceptio ex praeexistenti cognitione fit. (Marietti, n.9))」からであった。

もっとも先に示したように，アリストテレス自身のテキストでは，この冒頭の部分は，数学的知識などの具体的な事例をあげることを通して，そこから一般化を行うことによって「すべての教授，すべての学習」に言及しているように見える。トマスの『注解』においても，この一節において数学的知識や技術的知識の例をあげるのは帰納法であるとみなされる。(Cum dicit: Mathematicae enim etc., manifestat propositionem praemissam per inductionem. (Marietti, n.10))

しかしながら，トマスは，アリストテレスの『分析論後書』の書き出しの一節には，そこに書かれたことに先行する理由があったというふうにみている。前述したように，この一節を注釈するにあたって，トマスの『注解』は，「すべての認識」に言及していないと指摘することによって，「認識(cognitio)」の意味するところに多義性があることに注意を促しているけれども，それは，そうすることによって，前提となる別種の何らかの認識ないし知識の存在について，それが知識と呼ぶに値するかどうかという点も含めて，吟味の必要性を了解しえたからでもあった。しかしそれだけではない。というのも，トマスは，この冒頭の一節において，アリストテレスによる「プラトン」の知識論に対する明瞭かつ周到な批判をみてとっているからである。

いうところの「プラトン」の知識論を，そのままプラトン自身に帰することができるかどうかという点もまた，吟味を要することは言うまでもない。しかしそれはさしあたり，検討すべき課題として今後に残し，ここでは「プラトン」の名前を引き合いに出すことによって言おうとしていたことは何であったかということにまず着目したい。

トマスの『注解』によれば，アリストテレスが『分析論後書』において最初に論じているのは，論証的推論の必要性についてである。主題をなす論証的推論そのものについての考察は，この必要性について論じた後 (Bekker, 71b9 sqq.) に続くという構成になっている。これら二つの部分に該当するのは，トマスの『注解』のそれぞれ第1巻第1講から第3講までと同第4講以降である。(Qui [=liber Posteriorum analyticorum] dividitur in partes duas: in prima, ostendit necessitatem demonstrative syllogismi,de quo est iste liber; in secunda, de ipso syllogismo demonstrative determinat; ibi: Scire autem opinamur etc. (Marietti, n.7))

そのうちの最初の部分において，論証的推論の必要性は，論証的推論によって知識を得るためという目的に根拠づけられたものであるとされる。この点についてトマスは次のように述べ

[10] 以下、トマス・アクィナス『分析論後書注解』の引用は、マリエッティ版を使用する。

ている。

「目的に秩序づけられていることがらの必要性は，どんなことがらの場合であれ，その目的によって定まる。しかるに論証的推論の目的は，知識を得ることにある。それ故，もし推論ないし論証によって知識を得ることができなかったとしたら，論証的推論の必要性もなくなる。(Necessitas autem cuiuslibet rei ordinatae ad finem ex suo fine sumitur; finis autem demonstrative syllogismi est acquisitio scientiae; unde, si scientia acquiri non posset per syllogismum vel argumentum, nulla esset necessitas demonstrativi syllogismi. (Marietti, n.8))」

つまりトマスの『注解』に従うならば，アリストテレスにとって，われわれが知識を獲得するために推論が必要であるということは，裏を返せば，われわれは推論という手立てによって知識を得ることができるということにほかならなかったのである。しかもそのことがここで，「われわれの有する知識は推論によってもたらされるのではない」とする「プラトン説」をアリストテレスの批判の対象として取り上げることを通して，明らかにされているのである。

それではいうところの「プラトン説」とはどのようなものであったのか。また何のためにここで，「プラトン説」に対するアリストテレスの批判を取り上げているのであろうか。そもそも推論によって知識を得るとはどういうことであるのか。そのことを明らかにするために，何故「プラトン」がそれを否定したということを取りあげなければならなかったのであろうか。また反対に何故アリストテレスはそれを肯定することができたのであろうか。

3．「プラトン説」としてのイデア論

さて，『分析論後書』の注釈を試みるにあたって，トマス・アクィナスは，その冒頭の一節が，「プラトン説」の批判であったことを，『注解』の中で「プラトン」の名前を明記して指摘している。そのように指摘する根拠の一つは，『分析論後書』のテキストの後続の箇所(Bekker, 71a29)で，アリストテレス自身による『メノン』のテキストへの言及がなされているというところにもあった[11]。しかしそれに先立って，冒頭の一節においてアリストテレスの言わんとするところを理解するために，「プラトン説」を批判する文脈において，「われわれの有する知識は，推論によることなしにもたらされることができない」ことが，トマスの『注解』において指摘されているのである。

それによれば，いうところの「プラトン説」は，「われわれ自身のうちにある知識(scientia in nobis)」に関するものであった。その意味で，この説は「われわれの有する知識」が，「イデア的形相(formae ideales)」の刻印という仕方で，「われわれの魂」ないし「われわれ自身」のうちにもたらされると主張するものであった。しかもそのことを，「質料から分離した形相(formae a materia separatae)」としての「イデア的形相」が，自然の諸事物において，質料的な事物の形相として分有される仕方で事物の生成が行われることと対応させているというのである。(Posuit autem Plato quod scientia in nobis non causatur ex syllogismo, sed ex impressione formarum idealium in animas nostras, ex quibus etiam effluere dicebat formas naturales in rebus naturalibus, quas ponebat esse participationes quasdam formarum a materia separatarum. (Marietti, n.8))

ところで「イデア的形相」は「質料から分離した形相」として，質料的世界の外にあって，質料を伴うことなしに存在していること，またそれは，すべての自然的存在に対する範型として関わるとともに，事物認識の根源として認識者のうちに内在するということは，イデアの存在仕方として，トマス・アクィナスが『神学大全』（第一部十五問）において展開させた，神の観念としてのイデアの存在論証の中で既に論じていたことである。そこでは，「世界は偶然によって生じたのではなく，知性による仕方で事をなす神によってつくられたのであるから，世界がそれに似せてつくられた形相が，神の精神のうちに存在しているのでなければならない(Quia igitur mundus non est casu factus, sed est factus a Deo per intellectum agente, ut infra [*Sum. theol.*,

[11] Plato, *Meno*, 80e in J.Burnet.(ed.), *Platonis Opera*, t.3, OCT, 1903(1968). トマス・アクィナスがこれに言及するのは、『分析論後書注解』lib.1, lect.3. である。

I, q.47, a.1] patebit, necesse est quod in mente divina sit forma, ad similitudinem cuius mundus est factus.)」[12] と言われている。

つまり，トマス・アクィナスの理解するところに従うならば，世界の原因としてのイデアは，要するに，世界の原因として自らを認識する神的存在そのものであった。そこで，トマスにとって，認識者としての神的知性の自存性を容認することはできても，認識内容としてのイデア的形相がそれ自身として自存するという点は，否認されなければならなかったのである。

しかしながら，その点を除けば，トマスのイデア論においても「イデア」とは「個々の事物とは別に存在する，諸事物の形相」であって，一つには，事物の範型がその事物の形相であると言われる場合がそれであり，いま一つには，そうした事物の形相が，認識対象の形相が認識者のうちにあらかじめ存在する仕方で，事物の認識の根源になっていると言われる場合がそれであるとされる。(per ideas intelliguntur formae aliarum rerum, praeter ipsas res existentes. Forma autem alicuius rei praeter ipsam existens, ad duo esse potest; vel ut sit exemplar eius cuius dicitur forma; vel ut sit principium cognitionis ipsius, secundum quod formae cognoscibilium dicuntur esse in cognoscente.)[13]

ただし次の点にも相違がある。偶然によって生じるのでないものはすべて，目的としての何らかの形相の実現を図る作用者の働きを通して存在するということが，トマスのイデア論において，神的知性における事物の形相の先在を提唱する根拠であったけれども，加えて，その先在の仕方は，「自然的存在による(sec. esse naturale)」のではなく，「可知的存在による(sec. esse intellibilile)」とされるからである。

人間が人間を生み，火が火を生じるという例が，自然的存在による先在の場合であり，建築家が建築すべき家について事前に知っているという例が，可知的存在による先在の場合であるという。そこで神による世界の創造は，神から神が生じるのではなく，神ならざるものが生じるのであるから，世界の存在に先行するイデア的形相は，神的知性において，可知的存在によってあらかじめ存在しているとされたのである。

しかしこの分類は，神によって創造された世界の中での，自然的存在による形相の先在を否定するものではなかった。被造の知性的作用者における，可知的存在による形相の先在についても同様である。神的知性におけるイデア的形相の先在は，被造的世界全体に対する神的存在の先在性に関することがらとして，いわば次元が異なると言わなければならないからである。

ところが，『分析論後書注解』において言及される「プラトン説」において，可知的存在による先在は，自然的存在による先在を否定することを伴いえた。それは，自然的な作用者は，自然界の諸事物のうちに形相をもたらすものではなかったからである。事物が形相を得るのは，質料から分離して存在する形相を分有することによってであった。自然的作用者は，そのために単に質料を整えるものであったにすぎなかったのである。(Ex quo sequebatur quod agentia naturalia non causabant formas in rebus inferioribus, sed solum materiam praeparabant ad participandum formas separatas. (Marietti, n.8.))

ここからさらに，「プラトン説」においては，われわれが事物の知識を得るのも，われわれ自身の認識作用によるというよりむしろ，質料から分離して存在する形相がわれわれのうちに，いわば刻印されることによって，事物の知識がもたらされることによるとされる。そこで「［自然的作用者が事物のうちに形相をもたらすのでないのと］同様に，研究や研鑽を重ねることによって知識がわれわれのうちにもたらされることはなく，ただ妨げになっているものが排除されるだけで，ひとはいわば知っていることがらの記憶へと引き戻される。ひとは分離した形相の刻印によって生まれながらにして知っているとした (Et similiter ponebat quod per studium et exercitium non causatur in nobis scientia; sed tantum removentur impedimenta, et reducitur homo quasi in memoriam eorum, quae naturaliter scit ex impressione

[12] Thomas Aq., *Summa theol.* q.15, a.1. in P.Caramello (ed.), *S.Thomae Aquinatis Summa theologiae*, cum textu ex recensione Leonina, Pars Prima et Prima Secundae, Marietti, 1952.

[13] *Ibid.*

formarum separatarum.(*ibid.*))」のが，「プラトン説」にほかならなかったのである。

4．「プラトン説」に対する論駁

『分析論後書』の主題が，特に論証的な推論としての三段論法について詳細に論じることにあったということは，先にも指摘したように，トマスの『注解』においてトマス自身によって確認されている。しかしトマスによれば，そのことは同時に，論証の必要性を否定する「プラトン説」に対する，アリストテレスの論駁にほかならなかったのである。「プラトン説」はわれわれに確実な知識を与えるものではないと論駁することを通して，アリストテレスは反対に自らの知識論によって論証の必要性を明らかにしたとみなされているのである。

「プラトン説」において，われわれの有する知識は，各人の研究や研鑽といった知的営為を通して得られるのではなく，いわば捺印によって印影が紙の上に残るように，自存する形相のはたらきによって直接われわれのうちに知識がもたらされるという知識論が提唱されたことによって，推論によって知識を得るという必要性が否定された。これに対して，アリストテレスは異なる知識論を提唱し，われわれが知識を得るために論証的推論が必要であることを結論づけている。

ほかでもなくこのような結論を得るために，「プラトン説」においてその知識論の前提であるイデア原因説に対する論駁を含めた反論が，アリストテレスによって試みられているというのである。この点で『神学大全』第一部第十五問におけるトマスの「プラトン説」理解と異なる。そこではトマス独自のイデア論を提唱することを通して，いわば「プラトン説」を擁護する余地についても吟味されていると言うことができるからである。

しかし『注解』おいてトマスは，もっぱらアリストテレスの説にのみ言及し，「アリストテレス説はいずれの点に関しても反対的である(Sententia autem Aristotelis est contraria quantum ad utrumque (Marietti, n.8))」とする。アリストテレスの論駁は，われわれにおける知識の形成に関する論駁のみならず，自然的な作用者による事物の生成に関する論駁を含んでいるというのである。まず，「アリストテレスは，自然の諸事物の形相は質料において存在する形相によって，すなわち自然的な作用者の有する形相によって現実態へともたらされるとした (Ponit enim quod formae naturales reducuntur in actum a formis quae sunt in materia, scilicet a formis naturalium agentium.(*ibid.*))」のである[14]。

そこからさらに，「同様にして，アリストテレスは，知識がわれわれ自身のうちで現実態におけるものとなるために，われわれ自身のうちに何らかの知識の先在を要する (Et similiter ponit quod scientia fit in nobis actu per aliquam scientiam in nobis praeexistentem.(*ibid.*))」とし，「これこそが，われわれ自身のうちで三段論法（推論）や何らかの論証を通して知識が形成されることにほかならない (Et hoc est fieri in nobis scientiam per syllogismum aut argumentum quodcumque. (*ibid.*))」という知識論を提唱しているというのである。

このようなアリストテレスの知識論を支えているのは，次の一節に示された了解事項である。それは『注解』のこの箇所に続けて，次のように付記されている。「何故ならわれわれは，論証によってあること〔先行する何らかの知識〕から別のこと〔確実な知識〕へと進むからである。(Nam ex uno in aliud argumentando procedimus. (*ibid.*))」

「プラトン説」におけるように，外的な分離形相が刻印されることによって，直ちに知識が賦与されるのであれば，このような過程が存在

[14] 人間（親）から人間（子）が生まれるという場合がこれに該当するのであるから、親の形相(forma)が子に伝達されることによって、子が形相化(informare)された結果、両者の有する形相の間に類似性が見出されることになるという説明の仕方は、遺伝情報(genetic information)の伝達という言い方・考え方と共通するところがあるとも言えよう。むろん「形相」は、遺伝子上の塩基の配列の規則的な順序そのものではなく、それをももたらす別個の原理であるから、遺伝子とはまったく別ものである。情報(information)を得ることによって知識が得られるという言い方もごく自然である。それだからといって、一般に、質料形相論や可能態と現実態に関する形而上学の理論が理解され支持されているというわけではない。しかしこの用語法の背後に語義の変遷の歴史を想定することができよう。

することは了解されない。しかしここでは反対に，人間存在を含めて自然の諸事物が，時間的経過を辿りながら，可能態から現実態へと移行するという過程を持った存在であるという洞察にもとづいて，いうところの「プラトン説」は否定されなければならなかったのである。

この点が了解された上で，人間における知性的本性に関しても，認識作用によって可能態から現実態へ進む過程を経て，知的存在として完成されることになると考えられているのであろう。

そのことが，理由になって，トマスの『注解』において，『分析論後書』の冒頭の一節に「知性的(intellectiva)」という語が付加されたのは，「感覚や想像による認識を排除するため(ad excludendum acceptionem cognitionis sensitivae vel imaginative (Marietti, n.9))」であったと説明しているのであろう。

またそのためにトマスは，『注解』の中で，知性による認識の場合にのみ推論によって確実な知識を得ることが可能になるという意味で，「あることから別のことへと進むことは，理性にのみ属していることがらである(Nam procedere ex uno in aliud rationis est solum.(*ibid.*))ということを繰り返したのではないであろうか。

アリストテレス自身のテキストでは，doctrina (διδασκαλία)と disciplina (μάθησις) に付加されている語は，διανοητική である。これを翻訳する際に，知性的能力を意味する語(intellectiva) を用いているのは，ヴェネチアのヤコブのラテン語訳である。メルベケ訳は，推論によって合理的に思考することを意味する語(ratiocinativa) を用いている。そこで，メルベケ訳ではなく，ヤコブ訳を採用したトマスは，この選択によって，思考法のみに着目するのではなく，知性的本性を有する人間は，認識作用によって知識を得ることを通して，知的存在として完成されるにいたるという過程をもった存在であることをも考慮に入れて『注解』を試みたのであろうことが推察されるのである。

5．おわりに

『分析論後書注解』第1巻第1講において，トマス・アクィナスは，人間知性における知識の形成について，「プラトン説」を排除したアリストテレスに与している。ここでは確実な知識を得るために，先行する何らかの認識を前提としてそこからしかるべき推論の過程を経て新たに何らかの認識を結論として引き出す必要があるというアリストテレス説が支持されているのである。

この『注解』においてトマスは，さらに『分析論後書』のラテン語訳テキストに添って，論証的推論によって確実な知識を得るための前提となる，「先行する何らかの認識」について考察を進めている。その一方で，トマスは，『分析論後書』から学んだ知識論を，アリストテレスのテキストの注釈という文脈を離れたところにおいても活用していると言うことができる。

というのも，『神学大全』において，トマス・アクィナスは，「人間の救済のために，人間理性にもとづいて探求される哲学的諸学問のほかに，神の啓示にもとづく何らかの教えが必要であった (Necessarium fuit ad humanam salutem, esse doctrinam quandam secundum revelationem divinam, praeter philosophicas disciplinas, quae ratione humana investigantur.)」と論じた際に，あわせて「神に関して，人間理性によって探求することが可能なことがらについても，人間は神の啓示によって教えを受けることが必要であった (Ad ea etiam quae de Deo ratione humana investigari possunt, necessarium fuit hominem instrui revelatione divina.)」ことを明言しているからである[15]。言い換えれば，「聖なる教え(sacra doctrina)」と呼ばれる神学は，神的啓示にもとづく教えを何らかの先行する認識として保持した上で，そこから新たな確実な知識として引き出されえたのである。

「神と至福者たちの有する知 (scientia Dei et beatorum)[16]」は，信仰の内容として，それ自身としては確実な知識であろうにしても，人間理性によって探求され，論証された知識ではない。しかし，それが啓示によって直接もたらされるという道筋があることは，必ずしも否定されない。そのかぎりにおいて，いわば信仰の領域を

[15] Thomas Aq., *op.cit.*, q.1,a.1c.
[16] *Idem*, a.2c.

も含んで展開されるトマス・アクィナスの知識論においては，「プラトン説」は必ずしも全面的に排除されていなかったとも考えることができる。

人間理性における確実な知識の形成に関するこのようなトマス説は，「啓示されうることがら(revelabilia)」の領域において，啓示によって受けた何らかの認識を前提して，推論を経て獲得される知識が成立するという，神学的知識の合理性・確実性を説明する理論としても展開されえたのである。

（みずた　ひでみ，広島大学［哲学］）